

ようこそ・源左

『妙好人因幡の源左における宗教的生』

岡村康夫

【論文要旨】 日本仏教史の最周辺に「妙好人」と呼ばれる浄土教の流れを汲む一群の人々がいる。「妙好人」という呼び名は江戸時代末期に編纂された『妙好人伝』以来、一般に流布、定着して来たものである。それは従来の『妙好人伝』研究が明らかにして来たように、「体制順応」「本山崇敬」「法主志向」等の代名詞でもある。ただし、それらの妙好人のなかでも他の妙好人と一線を画する傑出した宗教的生を生きる人々がいる。因幡の源左もその一人である。彼が日本仏教史のなかで果たした役割は決して大きいものとは言えない。しかし、彼において開かれた宗教的生の境涯は極めて純度の高いものと言わざるを得ない。そこには単なる時代的あるいは地域的限定を超えた根源的宗教的生が確認される。日本仏教史はまさにこのような最周辺の人々によって活力を与えられて来たと言える。

拙論では彼の言行録において確認される宗教的生を、一、その発端としての回心と、二、その現われとしての行動と、三、その自覚内容と、四、その最終的覚悟について明らかとする。そこでは浄土教的宗教的生に徹した生の始源から、その生が最終的に到着するところが明らかとなる。

目次

はじめに、稱へてよし稱へでもよし

- 一、ふいつと分からしてもらつたいな
- 一の一、おらが死んだら親様のため
- 一之二、源左、もう聞こえたなあ
- 一之三、すとんと楽になつて

二、その荷物、ちつくり持たしてごしなはれなあ

- 二の一、よう持たして下んした
- 二之二、他人の田圃の草まで取らんでもえ、がなあ
- 二之三、そつちのえ、とこを刈んなはれなあ

三、何をするか分からんけれ

- 三の一、人さんに堪忍して貰つてばつかり
- 三之二、死ぬまぢや何をするかわからんけれ

四、重荷を卸さして貰ひまして

- 四の一、竹や、まあいなあいや
- 四之二、如来さんからの御催促で御座んす

おわりに、鼻が下に向いとるで有難いぞなあ

はじめに、稱へてよし稱へでもよし

拙論は妙好人・因幡の源左⁽¹⁾に於いて現われた浄土教的宗教的生の意義を、彼の言行録を手がかりに明らかにすることを目的とする。先に拙論「なむあみだぶにこころとられて」妙好人浅原才市の詩⁽²⁾においては、才市自身の書き残した一種の宗教詩を手がかりに、そこに開かれた宗教的生の意義を明らかとした。才市と源左とは「静と動」という全く両極に位置するタイプの妙好人である。ただし、そのこと自体は両者のいずれも眨めるものではない。むしろ、その両極に位置しながら、彼らの到り得た境涯⁽³⁾が見事に符合するところにこそ、その勝れた宗教的生の意義を見出すべきである。

さて、「静と動」とは彼らの日々の生活そのものであった。才市は下駄職人として終日その仕事場に座し、源左は農に従事する者として朝早くから夜遅くまで田畑に働いた。そのような生活を通して彼らが表現し得たものはいずれも遜色がない。才市は才市の生を全うし、源左は源左の生を全うする。しかも、そういう仕方では彼らの生を貫いて働くものが両者にはある。そして、その貫いて働くものを両者が存分に生き抜くこと

ろに開かれる境涯こそ注目に値する。才市の詩作は最終的には肯定も否定も超脱した宗教的生の戯れと解することができた。それは典型的には「うむしろい」という言葉において確認された。確かに、源左は才市のような詩を歌う訳ではない。しかし、源左の言行録に残されたものには、むしろ才市以上に生き生きとした宗教的生の躍動を見ることができ、その言動は生の現場において示されるが故に重く、しかもその重さが重さのまま、「ようこそ」と落着される。ここに源左における宗教的生の卓越性がある。源左は臨終の床で次のように言つたと伝えられる。

「よし／＼、出る念佛は抑へでもよし、無理に出ん念佛を引張り出しやあでもよし、稱へてよし稱へでもよし。邪魔にならんでのう。何んにもこつちにやいらんだけのう。ようこそ／＼、なんまんだぶ／＼。」
(二二八 源左と直次) (傍点筆者)

ここで源左は直次という同行と、二人とも臨終の床に就いて、まさにぎりぎりの問答をしている。いよいよの境に立たされて聞く直次は勿論、真剣である。それに答える源左も一言も無駄な言葉は語らない。まさ

に一句一言責任ある応答をしている。直次の「おらあ、いつかな喜ばれんだが」という問いに、「源左もいつかな喜ばれんちつてごせ」と言い切る。ただ、源左は決してこの直次との遣り取りを単なる自己責任において行なっている訳ではない。彼の言葉にはすべてを佛に放下した安心がある。その安心の前では喜びも、あるいは念佛すらも無用となる。また、次のように源左は言っている。

「よし／＼念佛は稱へんでもえ、けんのう。助かるにきめて貰つとるだけ、念佛はいかな後生のたりにやならんだけのう」(同上)

このように源左においても才市と同様に、あらゆるこだわりから解放された生の境涯を確認できる。浄土教的生の真骨頂は、まさにこのように念佛を通して、しかも「稱へてよし稱へでよし」というところ、すなわち「何んにもこつちにやいらんだけのう」というすべてを放下した安心の境涯へと超え出るところにある。そのような境涯へ如何にして源左は入つていったのか。その点を先ず次に考察したい。

一、ふいつと分からしてもらつたいな

源左の妙好人としての生は、彼が言ったと伝えられる「ふいつと分からしてもらつたいな」(一 入信)というところから始まる。また、その後の彼の言動はそのことの徹底・深化として、つねにそこから出て、そこへ還るものとして領解される。したがって、この「ふいつと分からしてもらつたいな」ということこそ、彼において開かれた宗教的生の意義を理解するうえで極めて重要な意味をもつものと言える。そこへと到る経過は源左自身の言葉として残されており、ここではまず、その言葉を手がかりに源左において生じた生の転回について考察したい。

一の一、おらが死んだら親様のため

さて、源左の回心は単なる日常生活の連続線上で生じたものではない。それは父親の突発的死という、それまでの源左の生活を根本的に揺さ振る出来事を切っ掛けとして生じたものである。その出来事を源左は次のように述べている。

おらが十八の歳との秋、舊の八月二十五日のこつてやあ。親爺おやぢと一緒に昼まで稲刈しとつたら親爺はふいに気分が悪いちつて家に戻つて寝さんしたが、その日の晩ばんげにや死なんしたいな。(一 入信)

この父親の死によつて、源左は彼がそれまで安住していた日常的生の連続性を突然破られる。誰しもその近親者の死によつて衝撃を受け、それまでの生を反省させられることはある。ただし、ほとんど場合、それは一過性のものに終わり、時が過ぎると、いつのまにか誰もがまた日常的生のなかへ埋没する。源左の場合、何故にそれが新たな生への転回となつたのか。それを解く鍵は父親の遺した言葉にある。才市も「おやのゆいごん なむあみだぶつ」と言った(『浅原才市翁を語る』三十二頁⁶⁾)。源左もまさにこの「親の遺言」(三入信)によつてその「限界状況(Grenzsituation⁷⁾)」に立たされたのである。ただし、この源左の回心は飽くまで浄土教的生の文脈のなかで起きており、その点をまず理解したうえで彼の言葉に耳を傾けなければならぬ。源左は次のように言っている。

親爺は死なんす前に、「おらが死んだら親様のため」

ちつてなあ。その時から死ぬるちゆうなあ、どがんこつたらあか。親様ちゆうなあ、どがなむんだらあか。おら不思議で、ごつついこの二つが苦になって、仕事がいつかな手につかいで、夜さも思案し晝も思案し、その年も暮れたいな。翌年の春になつてやつとこさ目が覚めて、一生懸命になつて願正寺様に聞きに参つたり、そこらぢゆう聞いてまはつたいな。(同上)(傍点筆者)

「おらが死んだら親様たのめ」あるいは「おらが死んで淋しけりや親をさがして親にすがれ」(一 入信)という遺言、この言葉がその後、源左が「法を聞き始め」(一 入信)るうえで決定的なものとなる。すなわち、この言葉によつて初めて源左は浄土教的聞法への道を歩み始めたのである。ただし、源左は容易に「親」を探し当てた訳ではない。

一 の二、源左、もう聞こえたなあ

さて、源左はこの「親さがし」という極めて浄土教的色彩をもつて語られた宗教的課題の前に立たされ、呻吟・懊悩する。ここでは肉親の親を失つた悲しみが、

「親の遺言」という決定的な意味をもつ言葉によつて、全く新たな次元での回答を求めて止まないものとなる。源左は次のように言っている。

親がなあなつてみりや世間は狭いし、淋しいやら悲しいやらで、おらの心はようにとほけてしまつてやあ。それから親の遺言を思ひ出して、どつかでも親をさがさにやならんと思つて親さがしにかゝつてのう。「親をさがせ」ちつたつて、何処におられるむんだらあか、「親にすがれ」ちつたつて、どがな風にするむんだらあかわかりやせず、おらも何んほこそ親さんに背を向けたり、捨て、しまつたりしたこつたかわからんだいのう。御本山にもさいく上らしてもらつてのう、しかられたりどまかされたりしたいのう。むつかしいつて、わがむつかしゆうすつだけのう。(二 入信)(傍点筆者)

この「親さがし」という形で語られた宗教的課題は決して直線的・連続的に答えられる課題ではない。源左の言うように「親をさがさにやならん」という気負いはそのまま「親さんに背を向けたり、捨て、しまつたり」することになる。ただし、ここでの源左の言葉

はその課題を透過したところから語られており、そこには既にある意味で「親さがし」の回答が示されている。それは「親さがしにかゝつてのう」という言葉や、「むつかしい」——つて、わがむつかしゆうすつだけのう」という言葉にある。すなわち、問題は「親さがし」にかかるこちら側にあるのである。そこでは問うものが徹底して問われるという宗教的問いの根源的構造が見事に顕になつてゐる。⁽⁸⁾ 宗教的問いを問う者は、その問いを問うことによつて、その問いから益々遠ざかつてゐる自分に気付かざるを得ない。問いを問ひながら、まさにその問いに真剣に対峙し得ず、いつまでもこのうのと日暮しをする自分に、ふと砂を噛むような気持ちにさせられるのである。そういう、「しぶとい」怠惰な自分になお問いを問い続けさせるのは、もはや自分ではない。それはまさに源左の言う「親心」でしかない。それは一つには源左にとつては「お寺のご隠居さん」の「源左、もう聞こえたなあ、有難いなあ」という言葉を通して現われている。源左は次のように述べてゐる。

お寺のご隠居さんにや、さいく聞かして貰ひ、長いことお世話になつてやあ。いづつもお隠居さんは

「源左、もう聞こえたなあ、有難いなあ」つて云つてごしなはつただけどやあ、どうがしても聞えなんだいな。ご隠居さんにやすまんし、しまいにやしぶとい我が身がなさけなあになり、投げちやあしまへず、じつとしちやをられんで、どがぞして聞かして貰らはあと思つて、御本山に上つたいな。御本山で有難い和上さんに御縁にあはしてむらつたけど、どつかしても親心が知らしてもらへず、仕方がなあて戻つたいな、おらあ、ように困つてやあ。(一 入信) (傍点筆者)

ここでは源左は法を聞くことによつて新たな活路を見出せるどころか、「ように困つてやあ」と、いよいよ窮地に追い込まれてゐる。引くに引かれず、進むに進めない。そういう進退窮まったところで、なおも源左が聞くことを放棄しないのは、もはや源左自身の求道心と言へるようなものによつてではない。源左に残つてゐるのはただ「ご隠居さんにはすまんし」あるいは「なさけなあ」という気持ちだけである。後に源左は、棚田このに「聞かしてもらいかけにや、よかつたにや」という法を聞き抜く難しさを問われた時、「うんにや」——こゝまでしてもらうのがおうことだけのう」と答えている(二 入信)。それは「こゝまで」追ひ

込まれるということ自体が、自分の力によつてではないということの意味する。「すまん」あるいは「なさないあ」という源左の言葉には、いまだ彼には全く届かない仕方においてではあるが、彼において、しかも彼を通して働く力の投影がある。

一の三、すくと楽になつて

さて、源左は才市と対極的位置にある動の人である。しかも、先にも述べたように源左のそれは生活そのものに裏打ちされた動である。このことは彼の宗教的生の特異性であるとともに、その生の出発点にある回心そのものに当初から含まれていたものでもある。前に進むことも、後に退くこともできなくなつた源左に「ふいつと」活路が開かれたのは、まさに牛に草を負わせようとした動きにおいてである。源左はその時の経験を次のように述べたと言われている。

ところが或年の夏でやあ。城谷じょうだんに牛うしを追うて朝草刈に行つて、いつものやあに六把刈つて、牛うしの背の右と左とに一把握とらづ、附けて、三把目を負はせうとしたら、ふいつと分わかからしてもらつたいな。牛うしや、われが負ふ

てごせつだけ、これがお他力だわいやあ。あ、お親さんの御縁はこ、かいなあ。おらあその時にや、うれしくてやあ。(一 入信)(傍点筆者)

この「ふいつと分わかからしてもらつたいな」ということは動の人・源左においてしか起き得なかつた出来事であるとも言える。源左は常に行動において自己表現する人であつた。彼はその生涯の間に何度もその精農・勤勉・篤実によつて推され、表彰されている。それは恐らく彼がこの世に生を受けて以来、父親と一緒に農に従事しながら培つてきた性質と言へる。そういう美德とも言うべき性質が、法を聞くことにおいても、さらに後に述べるように法において生きることににおいても生かされたと考えるべきである。牛に草を負わせようとして「ふいつと分わかからしてもらつたいな」と源左は言うが、この点はまた次のようにも伝えられている。

城谷じょうだんに朝草刈りに行つてのう。デンや、今朝はわれにみんな負せりやわれもえらからあけ、おらも一把ないと負うたらあかいやちて、一把負うてもどりかけたら腹はらがにがつてえらあて、デン奴ぬに負はしたらすとんと楽になつて、らくでらくでこりやわがはからいでは

いけんわい、お慈悲もこの通りだちゆうことだらあや
あと思つてよろこばしてもらつたいのう。(二 入信)
(傍点筆者)

源左は「すくと楽になつて」と言うが、それはその
直前に自らが荷を負うという行為があつて初めて生
じた出来事である。すなわち、自ら荷を負うて「腹が
にがつてえらあて」ということを通して初めて、源左
は「わがはからいではいけんわい」と気付かしてもら
たのである。そこには行為を介して高められた緊迫感
の「極み(Akme)」に、その緊迫から一挙に解放され
る経験が、すなわちまさしく「放荷(Entladung)」
の経験が見事に言い表わされている。それは動の人・
源左において初めて良く起き得た出来事であつた。
源左における生の転回はこのようにして生じた。そ
して、その後の彼の生は常にこの「ふいつと分からし
てもらつた」ことの反復として、そこから出て、そこ
へ還るものと領解することができる。そもそも宗教的
生はこのことなしには始まらないと言える。ただし、
それは勿論そこで完成・終息してしまふものではない。
すなわち、そこで生きる苦しみも悩みも皆、雲散霧消
してしまふ訳では決してない。むしろ、それはそこを

起点として無限の深化・展相を始める。例えば、次の
ような源左の回心直後の経験は、その深化・展相の発
端と解することができる。彼は次のように語つたと伝
えられている。

牛でんに草を負はした頃、やつと夜が明けて来たいな。
そこにひと休みしとると、又悩みが起つて来てやあ。
その時「われは何をくよくよするだいやあ、佛にして
やつとるぢやないかいや」と如来さんのお聲がして、
はつと思つたいな。(二 入信)(傍点筆者)

この「はつと思つたいな」ということは先の「ふい
つと分からしてもらつたいな」ということの反復とし
て、その後の源左の生を無限遡及的に限りなく豊かに
していくものである。この点は源左のその後の生き生
きとした生涯を見れば、自ずと肯うことができる。

二、その荷物、ちつくり持たしてこしなはれなあ

日本的農に従事する者は、時として勤勉・篤実の性
質を示すことがある。源左もその一人であつたと言え
るが、彼を妙好人たらしめたものはそれのみではない。

確かに源左は人並み以上に勤勉・篤実な働き手であった。しかし、彼を本来働かしためたのは美德と呼ばれるような単なる道徳的性質ではない。繰り返し述べているように、動の人である源左は常にその行動においても自己主張をした人であるが、その行動を駆り立てたものは、先の「ふいつと分からしてもらつた」ことに含まれていたものである。したがってまた、逆に彼のその後の行動はその「ふいと分からしてもらつた」ものが何であつたかを語るものであつたとも言える。

二の一、よう持たして下んした

源左は「よく人の荷を持ちたがつた」（六六 荷物持）という。それは彼が牛の背に草の束を負わせた時に「ふいつと分からしてもらつた」ということと二重写しとなる光景である。一つには彼はそのことを話したいが故に「人の荷を持ちたがつた」とも言える。次のような話が伝えられている。

或日、源左が山越に我家に帰る時、子を負ひ両手にみやげものや荷物をいっばいに持ち汗を流しながら里行き嫁さんが通りかゝつた。「あねさん、その荷物

をちよつとおらにもたしなはれな、えらからあがやつたけど、嫁さんは早速にもたしてござれずに仕方ないで「なんまんだぶつ」ちつて念佛したら安心して「なら、もつてもらわあかいな」ちつて荷物をもたしてごしう。あねさん、是を持たしてもらつた代りに、おらが云うことを聞いて下んせえ、ちつてお話しをしいく、峠を降りてのう。よう持たして下んした。ようこそ、つてお礼を云つて別れたいの」と云つて帰り「今日は大儲をした」、なんまんだぶつ、と家の人に話した。

（六七 山越）（傍点筆者）

源左の言う「お話し」とは決して世間話ではない。それは突き詰めて言えば牛に草を背負わせて「すんとと楽になつた」話である。しかし、それはある意味で荷を負つて苦しんでいる人へのみ分かる話である。源左はまさにそういう好機を捉えて話をしたと言える。そもそも苦しみの原因は強情・我慢に荷を負おうとする者自身のうちにある。その荷を「ふいつと」放り出せば楽になる。しかし、そういう単純明快なことを素直に受けとめられないところに問題がある。例えば、せつかく源左が荷を持つてやつても、その荷を任せ切

る気持ちがなければ却って他の意味で苦しい思いをする。源左は「山越の時、人の荷物持ちをすると、源左は盗まにやえ、がと思つてついて来るで、お慈悲の話が出来てのう」(一六六、荷物持)とも言っている。人の親切を素直に受けられず、疑い心で自分自身を苦しめる。ただし、それは人の親切を疑う人のみことではなく、源左自身のことでもある。それは人に「お慈悲の話」をする好機であつたが、源左が源左に還る、すなわち「ふいつと分からしてもらつた」ところに還る好機でもあつた。それゆゑにこそ源左は、人の荷を持つて「よう持たして下んした」と礼を言い、また「今日は大儲をした」と喜びるのである。

二の二、他人の田圃の草まで取らんでもえ、がな源左は人の荷を持ちただけではない。好んで人の肩を揉んだり、あるいは灸をすえたりしたという。それは一つにはそのことによつて「お慈悲の話」をする機会を捉えようとしていたと言える。ただし、それだけであれば源左の行為は行為そのものとして純粹なものであつたとは言えない。それはある場合には押しつけがましい行為となつたであらう。確かに源左が様々

な機会を捉えて「お慈悲の話」をしていたことも事実であらう。しかし、源左を源左たらしめたものは、そのような押し売り行為ではない。そういう人間的はからいを超えて、源左が無心に動く時にこそ、源左は源左に還れたのではないか。あるいは、その時にこそ源左の言動は説得的であつたと言えるのではないか。そういう行為の人である源左の面目を伝える話も数多く伝えられている。例えば次のような話が伝えられている。

一人の女が田草を取つてゐる。畔で赤坊が聲をあげて泣いている。之を見て源左は「や、も泣いとるに、はやう乳吞まして、いんでやつたがえ、がのう」。女、「こ、だけは取つておかぬと、あした手づかえが来るで、もう一寸もう一寸と思つてやつとるだに」。源左、「よし、それじゃ、おらが代りにその草を取つてさんしようかいの。はやう乳吞まして、いんなはれ」。さう云つて源左は草を取り始めた。女、「さうして貰えば助かるがやあ、そんなら、お爺さん、あとをたのむけんなあ」。

晩くなつて心配して家の者が探しに来ると、しきりに草を取つてゐる。「お爺さん、他人の田圃の草まで

取らんでもえ、がなあ」。源左、「それがあに気の小さいことを云はんでもえ、佛さんのお心の中には、おらげいの、他人げいのつて区別はないだけのう」。さう云つて取り終わつてから家に戻つた。(五八赤坊)

ここでは源左は女に対して一言も「お慈悲の話」をしている訳ではない。源左は単純に赤ん坊の泣き声に動かされ、また女は素直に源左の好意に甘えている。少なくともこの時、この両者の間には何のほからいもない。ただ後で源左は家の者に「佛さんのお心の中には」と言い訳しているだけである。

二の三、そつちのえ、とこを刈んなはれなあ

才市は日々仕事場に座し下駄を削り、詩を歌つた。源左は朝早くから夜晩くまで田畑に働き、動いた。そこには本来、何らの人間的はからいも介在しない。ただ才市を才市たらしめ、源左を源左たらしめるものがそこには働いている。源左の面目が躍如するのはまさにそういう仕方で現われる言動においてである。それは一見奇行とも受け取られるが、そういう言動こそ単なる言説以上に説得的である。例えば次のような話が

伝えられている。

或男が源左の山に作つてあるかごを、しこたま盗んで束にして背負ふとしたが、重くて立ち上がるが出来ぬ。偶々通り合せた源左は、後に廻り、力を貸して無雑作に担がせてやつた。立つた拍子に振り向いて見ると、畑の主源左であつた。盗人は荷を打ち捨て、遁げて行つた。羽粟行道録 (八 かご)

ここでは源左は終始無言である。あるいは言葉を発表する暇もなかつたと言ふべきかもしれない。しかしそれ程、この時の源左の行為は人の意表を突いたものであつた。しかも、人間の常識を破るものが何の躊躇もなく、それこそ自然に源左を通して出ている。こういう時にこそ言われるべきであるが、それは実に「妙」である。また似通つた話であるが、この話以上に源左の面目が躍如している次のような話が伝えられている。

藏内村の宇三郎、或時城谷じょうたんの源左の畑で盗草をしてをつた。そこへ折悪しく源左が下りて来た。こりや悪いところを見られたわいと思つてゐると、源左「こ、もえ、けど、そつちのえ、とこを刈んなはれなあ」。

後日宇三郎、当時の心境を或人に述懐して、「叱られたのなら飛んで逃げるといふこともあるけれど、あゝ、云はれては逃げるにも逃げられず、あがみに困つたことは知らんがやあ」。(一〇 盜草)

「こゝもえ、けど、そつちのえ、とこを刈んなはれなあ」といふ源左の言葉には何のほからいもない。源左は恐らくこころに浮かんだことをそのまま素直に口に出しただけである。ただし、源左が語つた言葉はたつた一言ではあるが、その一言に完全に宇三郎は逃げ場を失っている。それは百言を尽くして語る以上の説得力を持つていたと言える。これ以外にも芋泥棒のために態々鎌を置いてやつたり(四、芋明月)、柿泥棒のために梯子をかけてやつたり(六、柿の木)、源左がいわゆる型破りの言動をしたことが伝えられている。しかし、それらの逸話は決して源左が単なる変り者であつたといふことを語つてゐるのではない。それはむしろ源左を通して現われた何か言説以上のものを伝えたいと言つて良い。源左には確かに才市のように詩を歌う才はない。しかし、源左の言動には才市のように詩とも劣らない宗教的生の躍動が感じられる。

三、何をするか分からんけれど

さて、源左は以上のように徹底して「おらがもの」(二九四 思ひ出谷口しな)といふことを捨てて人のために動き得た人であつた。そのように彼が動き得たのは先の「ふいつと分からしてもらつた」ことと別のことではない。それは「ふいつと分からしてもらつた」ことの深化・徹底であり、そして飽くまで浄土教的信の自覚内容として明らかにされていく事柄である。源左は「かうなつたが御信心、あゝなつたが御信心といふ風な沙汰は云つておられなんだ」(二七六 沙汰)と伝えられているが、彼の信心の行き着くところは例へば次の言葉に良く表されている。

源左、「誰が悪いの彼が悪いのちゆうても、この源左ほど悪い奴はないでう。その悪い源左を一番に助けると仰しやるで、他の者が助からん筈はないだがやあ。有難いのう」。井関元造(面影村)に語る。(二五八 悪い源左)

極めて浄土教的に表現された信の自覚内容、すなわちいわゆる悪人の自覚であるが、彼の揺るぎない言動

の一切はここから生まれる。繰り返して述べている「ふいつと分からしてもらつた」ということは、言い換えるならば、「親さんはなあ、こいつは落ちるより仕方がないけど、助けて下さるがなあ」(二九三 思ひ出 棚田はつ)ということである。ただし、それは全く逆説的内容であり、源左にとつて脱我的に「ふいつと分からして」もらう以外の仕方では領解できなかったことである。そして、またこの徹底した「落機」(二九一 落機)の自覚以外、源左が落ち着くところはないのである。

三の一、人さんに堪忍して貰つてばかり

源左の言動は上述したように浄土教的悪人の自覚を核として、そこから一切のはからいもなく自然と生まれ出ている。彼の甥の足利元治はまた源左のことを次のように伝えている。

源左爺さんのは何一つ話しても、他の人から聞かぬ話のみでした。その信仰の根元は、この世に自身より悪い者はないのだと云ふ自覚でした。さうしてお助けはこんな者を目当てにされるのだと云ふことでした。

(二九七 思ひ出 (六) 足利源治)

言行録のなかで繰り返えされるこの浄土教的信の逆説的自覚内容は、源左の肉となり血となったもの、すなわち身体化した行動原理であり、彼の言動の一切はここからのみ領解される。例えば、次のような京都の一燈園の西田天香との逸話が伝えられている。この時、源左は天香の講演会を聞きにわざわざ智頭町まで出掛けて行つたのであるが、結局彼が会場に着いたのは講演会の済んだ後であった。遠くから講演会を聞きに来た源左をねぎらう天香に対して、源左は逆に彼の肩を揉みながら次のような対話を始めている。

源左、「今日のお話しは、どがなお話しで御座んしたな」。天香、「お爺さん、年が寄ると気が短くなつて、よく腹が立つやうになるものだが、何でも堪忍して、こらへて暮しなされや。そのことを話したんだが」。

源左、「おらは、まだ人さんに堪忍して上げたことはござんせんやあ。人さんに堪忍して貰つてばつかりをりますだいな」。

天香氏にはこの答へが一度では分りかね、又念問ねんもんをされた。「お爺さん、何と云はれたか、今一度云ふて

くれんかな」。

源左、「おらあは、人さんに堪忍して上げたことはないだけつど。おらの方が悪いで、人さんに堪忍して貰つてばつかりをりますだがやあ」。

流石の天香氏もこの言葉には三舍を避けた様子であつた。高野須泰然録。(一五 源左と天香(一))

天香の言葉に間髪を容れずに答える源左、そこには他の彼の言動と同じく何のはからいも含まれてはいない。源左の言葉は反省熟慮のうえ発せられたものではない。しかも「当を得て妙」である。このまさに当意即妙の言動にこそ、源左の面目が躍如している。ここでの源左の言動は人間的思慮分別の世界を超えて、むしろ自在の域から発していると言わざるを得ないのである。

三の二、死ぬまぢや何をするかわからんけれ

上述したように様々の場面で自在に発せられる源左の言動、すなわち「妙」としか言い得ないような言動こそ源左を源左たらしめるものである。それは才市に詩を歌わしめたもの、また才市に「うむしろい」と言

わしめたものに通ずる。源左の場合、先の逆説的信の自覚内容がまさに遊戯・自在に展開されているのである。また、次のような源左の言葉が伝えられている。

河原村の房安藤蔵、「山根の者が、こんつあんを妙好人傳に出してやるつちゆうがのう」。源左、「死ぬまぢや出してごしなはるなよ。死ぬるまぢや何をするか分からんけれ、業が深いで縛られるかも知れんけえのう」。衣笠二省(一七四 妙好人(一))

この徹底した悪人の自覚は他人との比較に成り立つ単なる自己内反省的自覚ではない。それは源左に言わせる「お親さんの入智慧」(一八九 入智慧)であり、そこには徹底して「我といふことはない」(一八二 答)のである。また、源左は次のように言っている。

源左、「親さんから貰つたもの、そ、分けだけ、おらが話すと思つてごしなはるなよ。お親さんのお取次を源左がさして貰つとるだけだけえ、おらが話すことあ、いつかなないだいな」。棚田この述、「ごしなはるいなさる。「いつかな、少しも、全く。(一八〇 お取次)(傍点

筆者)

このような「我といふこと」が全くないところから発せられる言動であるからこそ、自在であり、また聞く者の耳をそばだたせるのである。すなわち、「こうなつた」あるいは「あゝなつた」というような人間的是からいを捨て、すべてを「親さん」に放下したところから為される言動こそ源左を源左たらしめ、また妙好人たらしめるのである。このような境涯から源左は「偽になつたらもうえゝだ、中々偽になれんのでう」(三〇 偽同行)と言つたり、あるいは「忘れるこそよけれ。あるけえ忘れるだけのう。忘れるがずつとえ、だ」(三一 忘れるこそ)と言うのである。それらはいずれもすべてのはからいを放下した自在の域から発せられた言葉である。

四、重荷を卸さして貰ひまして

さて、源左はその一生のあいだに単なる自己我慢あるいは自己慰撫では超えられないような不遇に何度も出会つた人である。源左の息子は二人まで精神に異常を来たし、彼の家は二度も火災にあつて丸焼となつた。

また彼は大金を注ぎ込んだ事業に失敗したり、詐欺擬いの行為で自分の持ち山を売られてしまったこともある。そのような不遇に出会うと、人は誰しもその苦しさをゆえに人を恨んだり、責任を他の者に転嫁したりする。そして、またその結果として却つて倍加された苦しみを負うこともある。しかし、源左はそのような不遇の只中で、ただ「ようこそ」と言う。ただし、それは単なる消極的な諦め、我慢あるいは居直りの表現ではない。それは飽くまで先に引用したように「何んにもこつちにやいらん」という徹底した自己放下を通してのみ開かれた境涯であり、またそこからのみ発せられる言葉である。

四の一、竹や、まあいなあいや

源左には、ゆう、みつ、竹蔵、萬蔵という四人の子供があつた。そして、その四人の子供がいずれも源左よりも先に世を去つた。なかでも長男、次男の竹蔵、萬蔵はともに精神に異常を来たし亡くなつた。このことは特に源左にとつて筆舌に尽くしがたい苦しみであつたと考えられる。そして、またそのことが源左の一生を宗教的に徹底・深化させる一因となつたことも疑い

得ない。人はむしろ苦しみの只中でこそ自己自身へ還り、真実へ一歩近づくことがある。狂ふ竹蔵を無言で追う源左の姿には特にそのことが感じ取られる。

源左の長男の竹蔵は、中年の頃一時精神に異常を来した。高い松の木に登つたりして、皆を手占摺らせた。源左は下から「竹や、濟まんが降りてごせいや」と云ふと、素直に降りて来た。竹蔵が狂つたまんまに歩けば、何も云はずに後について歩いた。日暮れになつた時、たつた一言「竹や、まあいなあいや」。(五三 狂ふ竹蔵)

源左の異常なまでの辛抱強さ、それは先にも述べたように彼が幼い頃から日本的農に携わるなかで培つてきた美德とも言えるが、ここでのそれはそういう単なる人間的辛抱の域を超えている。それは彼が「ふいつと分からしてもらつた」ことと相乗効果を起こし、源左に無限の諦念を可能にしたと言えるのではないか。それゆえにこそ狂つた竹蔵にも、源左の真情が伝わつたのではないかと考えられる。また、次のような逸話が伝えられている。

竹蔵は狂つても、父の源左にとつて牛が善知識となつたことを知つてゐた。一日家から牛を引き出して樹に縛り、そこを通る人毎に「牛如来牛如来」と云つて、之を拝めと勧めた。足利元治述(五五 牛如来)

狂つた竹蔵にまで「南無源左如来、南無源左如来」(五四 源左如来)と言わしめたものによつて源左の一生は貫かれている。それは源左が牛に草を背負わせた時「ふいつと分からしてもらつた」ことが、彼の様々な不遇との出会いを通して、反復的に受け取り直され、さらにそれが無限遡及的に深められるという仕方で行き着いていったと考えることができる。そして、それがまた源左に無限の諦念の世界を開いていったと言える。

四の二 如来さんからの御催促で御座んす

さて、「ようこそ」という言葉は源左が最終的に行き着く無限の諦念の世界を良く言い表わしている。それは単なる自己慰撫や消極的なあきらめの境地ではない。それはむしろそういう相対的な慰撫やあきらめが成り立つ基盤そのものが突き崩される経験を

通して開かれる境涯である。例えば、長男の竹蔵が死んだ時、源左は次のように言ったと伝えられている。

子供の死んだ時、藤蔵に源左、「竹はなあ、この世のきりかけを済まして参らしてもらつたわいの。おらあとろいだで、一番あとから戸をたて、参らしてもらうだがよう」。

「竹」、竹蔵。「きりかけ」、自分の分、碗一杯。「とろい」、のろい。

(四七 子供の死)

「この世のきりかけ」を済ましたという形で長男の死の受容は、「とろい」自分も必ず「あとから戸をたて、」という厳しい現実への覚醒と一つに成り立っている。次男の萬蔵が死んだ時も、源左は「あ、ようこそ」――、このたび萬はらかな身にして貰つてのう(四八 萬蔵)と言っているが、源左は息子達の死を通して、むしろ徹底した自己覚醒を迫られているのである。すなわち、源左が息子達の死を受け容れるということと、源左がその生の原点に還るといふことは一つのこととして出会われているのである。その点はまた次のような逸話に明らかである。

長男が死に、引続いて次男が死に、災厄が重なった。願正寺の住職が「爺さん、佛の御慈悲に不足が起りはせんかいのう」と尋ねると、源左、「有難う御座んす、御院家さん、如来さんからの御催促で御座んす。之でも往生は出来んか、之でも出来んかと、御催促で御座んすわいなあ。ようこそ」――なんまんだぶ」。

田中寒樓録。(四九 御催促)

「如来さんからの御催促」とは他ならぬ源左自身への催促である。ここでは長男や次男の死を悲しむ源左自身の足元が問われている。悲しみや苦しみの根源は外にあるのではない。それはむしろ自己自身のうちにある。「御催促」とはその悲しみの根源に直接食い入るものである。そして、「ようこそ」――「という言葉はまさにそういう仕方で脱根的に開かれた境涯から発せられているのである。家が火事に会つた時も源左は次のように言ったと伝えられている。

源左が五十代の頃、火事に会ふて、丸焼になつた。願正寺の住職が、「爺さん、ひどいめに逢ふたのう。こん度はがめたらうなあ」。慰められた源左は、「御院家さん、重荷を卸さして貰ひまして、肩が軽うなりま

したいな。前世の借銭を戻さして貰ひましただけ、いつかな案じてごしなはんすなよ。田中寒樓録。

「がめる」、よわる。「いつかな」、ちつとも。(五〇 火事)

「重荷を卸さして貰ひまして、肩が軽くなりましたいな」という言葉は決して瘦我慢のそれではない。それはまた源左が「ふいつと分からしてもらつた」ときあるいは「すとんと楽に」なつたとき、その「とき」に反復的に遡源する。すなわち、そこでは脱我的に苦しみの根を抜かれた「とき」が源左に再来する。死んだ息子達が生き返る訳ではなく、また焼けた家が元に戻るとも決してない。しかし、そういう不遇・苦しみをそのままに受け容れる境涯が、そういう「とき」の再来によつて源左に開かれるのである。

おわりに、鼻が下に向いとるで有難いぞなあ

息子達の死に特に際立つて現われている源左の諦念の世界は、彼の生活のあらゆる場面において「ようこそ」——「という言葉を通して実現されている。蜂に刺されても源左は「われにも人を刺す針があつたかいやあ、さても——、ようこそ——」(九六

蜂)と言う。また夕立に逢つてびしょ濡れになつても「ありがとう御座んす。御院家さん、鼻が下に向いとるで有難いぞなあ」(九七 夕立雨)と言う。源左において開かれた境涯は、決していわゆる神秘的な境地でも何でもない。それは結局あたりまえのことをあたりまえのまま受け容れるところにある。人の苦しみは本来そのあたりまえのことを素直に受け取ることができないところにある。しかもその原因はわれわれ自身のうちにある。源左の言う「ふいつと分からしてもらつた」ということには、そういう逆転的・抜本的視野の転回がある。そして、「ようこそ——」という言葉には、そういう視野の転回において開かれた無限の諦念の世界がある。

註

- (1) 本名、足利源左衛門(一八四二—一九三〇)、現在の鳥取県気高郡青谷町山根の生まれ。詳しくは『妙好人 因幡の源左』、柳宗悦・衣笠一省編、昭和五十年、百華苑発行所収の柳宗悦著「源左の一生」を参照。なお、同文は岩波文庫『柳宗悦 妙好人論集』にも収録されている。

(2) 「山口大学哲学研究」第九卷、四五―七八頁参照。

(3) 「境涯」という言葉に関しては、上田閑照著「西田幾多郎 人間の生涯ということ」、岩波書店、同時代ライブラリー、一九九五年刊を参照。ここでは例えば「境涯」ということについて次のように書かれている。

「生きる」ということへの総体への一つの決着を含んだ「生き方」、「死に方」と一つであるところの「生き方」、それを表すのが「境涯」という言葉です。」(同上、二十六頁から二十七頁参照)。

あるいはまた次のように述べられている。

「近く親しい者の死において、またそれを機縁とした死の自覚において、そのような虚空ともいえるべき限らない「開け」を予感し実感しながら、世界内存在というだけでなく、そのような虚空にあることが「もう一つの別次元」となって生きられるとき、その「境涯」において生涯は真の「生涯」になります。」(同上、二十九頁参照)。

浅原才市も「虚空」という言葉を使うが、彼においても、ここで述べられているような意味での「境涯」が開かれていると言える。拙論「なむあみだぶにこころとられてく妙好人浅原才市の詩」七四頁以

下参照。

(4) 拙論、同上、六四頁以下参照。

(5) 以下、引用箇所は「妙好人 因幡の源左」の編者による整理番号と表題とによって示した。

(6) 「浅原才市翁を語る」、寺本慧達、昭和二十七年、千代田学園発行。

(7) Jaspers, K., *Psychologie der Weltanschauungen*, 1971, Springer-Verlag, 256-280参照。ヤスパースは人間が「限界状況」に立たされる個別の状況として「闘争(Kampf)」、「死(Tod)」、「不慮の出来事(Zufall)」および「罪(Schuld)」を挙げている。

(8) 「宗教とは何か」、西谷啓治著、昭和四十五年、創文社発行、3頁から7頁参照。

(9) F. W. Schelling, *Ueber die Natur der Philosophie als Wissenschaft*, Originalausgabe, IX, 231を参照。Entladung はまさに Entladung として「荷を放り出すこと」を意味する。シェリングはこの「放荷」の経験を、「われわれの自我が自己の外へ」、すなわち「その主体である位置」の外へ立てられる「脱我(Ekstase)」の経験として述べている。K, 229参照。

(10) 「日本の霊性」、鈴木大拙著、岩波文庫、二三〇頁参照。

その他参考文献

鈴木大拙はこの才市の日々の姿に「遊戯三昧」を見る。次のように述べている。

「才市の下駄削りは、遊戯三昧の行為であり、無功用底の衆生済度である。才市の境涯は実に聖者の境涯であると言わなくてはならぬ。才市はこれを「親様と遊んでいる」と言う。そして、この遊びをそのままにして弥陀と一緒に往くのである。浄土へ往くもまた遊びにはかならない。即ち「浄土へ遊びとられる」と才市は言うのである。」

(11) 「東洋的な見方」、鈴木大拙著、岩波文庫、百頁から百七頁参照。

大拙は「妙」ということについて次のように述べている。

「だからいくらでも壊して壊して壊し尽くしたところから、なにか出てくるものを見る。それが玄のまた玄で妙だ、といたい。」(傍点筆者)

源左の言動が「妙」だと言い得るのも、徹底した否定・放下を通っているからである。

(12) 前出「源左の一生」、柳宗悦著、参照。

・「真実の人 妙好人」、松塚豊茂著、一九九三年、六角会館刊

・「信心の華 妙好人を語る」上・下、楠恭著、一九九八年、NHK出版

・「日本人はなぜ無宗教なのか」阿満利磨、一九九八年、ちくま新書。

・「真宗入門」鈴木大拙著、佐藤平訳、昭和五十八年、春秋社。

・「浄土仏教の思想十三 妙好人 良寛」柏原祐泉、大峯顕、一九九二年、講談社。

・「大乘仏典 中国・日本篇28 妙好人」水上勉、佐藤平編、中央公論社。